

No. 405 August 25, 2015

## The Japanese Spirit

追憶の記

# 春寒

窪田英樹

乳母富山サトの家は駒方屋の前の道を浜沿いに行き、急な坂を登りつめた崖沿いの古い家並みの一角にあった。吹雪がやんでからりと晴れあがった外気が頬に痛いほど冷たかった。道路のあちこちに雪の吹き溜まりが凍てつき、でこぼこを作っていた。志津は氷のようにつるつる滑る雪道をゴム長をはいてそろそろと用心深く歩いた。転んでおぶった征志にけがをさせてはという気遣いで、歩き慣れている雪道に彼女は汗をかいた。乳母の家の前に立つと、玄関のすぐ傍の大きな松の枝に雪がこんもりと積もって重そうに垂れ下がっている。この家にいたころ、その枝の雪めがけて雪の球をにぎって投げつけたものだ。雪の塊が一気に枝からどさりと落下するのが面白かった。飛び石伝いに門を入れて格子の入った重い玄関の戸を開けると薄暗いあがり口があり、そこに古ぼけた梅に鶯の構図の屏風が

立てられていた。甘酸っぱい臭いが漂っていた。乳母は玄関から入ったすぐ傍の部屋を居間にして、長火鉢の傍に座って熱い茶をすすりながら雪見障子から雪をかぶった庭の樹や灯籠を眺めるのが好きだった。志津は門を入ろうとして表札が変わっているのに気がついた。真新しい他人の表札であった。彼女は入りかけた門を出ると、少し離れたところからその家をみつめた。佇まいは志津が住んでいた当時と少しも変わっていなかった。「駒方さんではないですか」と女の声が背後でした。志津の姿を見かけて、隣家のおかみさんらしい人が出てきた。「なんでも留萌のご親族に身を寄せるとかで、お引越しになる直前に挨拶に来られました。駒方さんでは当然ご存じかと思っていましたのに」と彼女は話した。志津が田辺へ行っている間に乳母は引越していた。母のふじが乳母の引越しを知っていれば、志津の耳にも入っているはずだ。乳母が引越し先を連絡する必要がないほど、乳母と駒方の家は疎遠になっているのかもしれない。「あなたにもこんな赤ちゃんができましたのねえ。富山さんに見せてあげたら、さぞお喜びになるでしょうに」彼女は志津の小さな頃のことを覚えているようで、感慨深げに背の征志をのぞいたが、志津はその人のことは記憶になかった。志津は彼女に別れを告げ、

乳母の家の前の小道を崖ふちまで歩いていった。その位置から江差湾が一望できた。真っ白に雪をいただいた鷗島が凍ったように浮かんでいた。島影の向こうの海は又吹雪始めたのか、白く視界を閉ざしていた。白い吹雪の壁を押し破るように黒い波濤が押し寄せてきた。魚市場や漁業組合の倉庫の棟々は重そうに分厚い雪を載せ、船溜まりの漁船はしけを避けて身を寄せ合うように係留されていた。真っ直ぐに海に突き出た突堤は波のしぶきと雪で凍り付き、巨大なつららのようになっていた。突堤を港の方へ辿り、魚市場の前の石畳を歩いてくると駒方の店舗が見えてくる。両親や兄弟たちは今ごろどうしているだろうか、幼い志津は走って家へ帰りたくなったものだ。志津を捉えて離さない乳母が怨めしくなったこともあった。田辺へ出立の朝、海は船影もなく鏡のような静かだった。駅へ向かう途中の坂の上で、志津はしばらく足を止めて海をみつめた。新冠へ向かう時、彼女は征志と二人でやはりこの坂の上で海を眺めた。坂を登るたびに彼女は妻になり母となった。海猫が波の白く砕ける磯に落下するように降下した。今では彼女は出征兵士の妻である。征志が彼女の背で大きな声をあげて身をそり返した。その声に突き動かされたように、彼女は道に戻り始めた。

志津の部屋は駒方の店舗の二階にある。この部屋はもともと商品置場に使われていたため、薬品の臭いがしみついていて、志津が帰ってくる、店の使用人が彼女に征之からの手紙を手渡した。文面はあっけないほど短かった。彼女の帰郷について、もう少し辛抱できなかつたものかと彼女を咎めているとも受け取れる調子だった。実家の窮状を訴えて、彼女のところへ送られてくる征之の月給のうちから二十円ずつ田辺へ送金してほしいと頼んであった。姑の政子が志津に送金させるように征之に念を押したにちがいない。志津は早速筆を執った。この帰郷は藤沢家の親の方から出て行けといわれたことだ。送金にしても、あちらの父親が病んでもいないのに自分の妻子の生活を犠牲にしてまで送金する必要はどこにもないと書いた。「征之さんには悪いけど、間違ったところへ志津を嫁がせてしまった」と、母は元一郎に蚊のなくような声で洩らしたそうだ。「父がお前の結婚を急ぎすぎたからな」兄もあきらめたようにいったが、志津は政子のために征之まで悪くいわれることが悔しかった。帝室林野局に採用されたばかりの征之が江差出張所へ赴任してきたのは二年前の夏の盛りであった。彼は駒方と道を挟んで斜め向かいにある下宿旅館辰巳館に下宿した。志津は稽古ごとの帰りに征之の姿を

初めて見かけた。日曜日の夕暮れであった。彼は浴衣がけで辰巳館から出てくると、砂浜の方へ下駄の音を高く鳴らして歩いていくところだった。「辰巳館に最近背の高い色の真っ黒な男が来ているね」ふじが女中の留子に聞いた。「ああ、あの人でしたら、ごりようさんでしょ。内地から赴任してきたばかりだそうですが、名前は存じませんわ」元一郎の妻の麗子が首をかしげている留子に代わっていった。「ふーん」ふじは鼻先で応えてそのまま黙ったが、志津は征之の姿を改めて思い出した。町の人たちは天皇陛下の山林を管理する帝室林野局江差出張所の職員を指して御領さんと呼んでいた。陛下直轄の官員は町の人たちの畏敬を集めていた。駒方も出張所から御用を承っていた。「御領さんは堅苦しくて息がつまるな」と、出入りの使用人たちは嫌った。すべてに遺漏を許さない張り詰めた出張所の雰囲気、使用人たちはなじめないようであった。間もなく、志津は征之と路上でばったり出会った。彼女が小学校時代からの幼なじみの高桑清子と連れだって日傘をさして歩いてくると、軍人のようにしやちこばって歩いてくる男がいた。志津は一目で彼とわかった。彼は日傘の中をのぞくようにして志津の顔を見たので、彼女は軽く会釈して通り過ぎようとした。彼は足を止めると、「このたび辰巳館

にお世話になることになりました藤沢征之と申します。よろしく」と紋切型に挨拶した。挨拶の仕方が唐突なので、清子は吹き出した。志津もやむなく挨拶を返した。征之は明らかに志津を知っているようだ。彼女はどのようにして彼が自分を知っているのか不思議に思った。新冠に来てから、征之はその秘密を明かした。「僕の部屋のカーテンの隙間から立ち話をしているおまえの姿をそっと見ていたんだよ」志津はその話を聴いて呆れた。石部金吉と聞いていた彼がそんなことをしていようとは想像もできなかった。辰巳館の征之の部屋から土堀越しに駒方の庭がよく見渡せた。志津はそれを知らなかった。彼女は庭に出て留子を相手に立ち話を楽しんだ。留子が漁師町の出來事を面白おかしく彼女に語って聞かせるので、彼女は征之に見られていたとも知らずに腹を抱えて笑ったものだ。征之はその彼女の姿を見染めて上司の出張所長を通して縁談を申し入れてきた。出張所長の彼に対する評価は高かった。人物、将来性ともに太鼓判を捺すとまでいって征之を勧めた。父の元右衛門はなによりも征之が帝室林野局の職員であることを信用して乗り気だった。「陛下の山をお守りする人に嫁ぐことは、おまえにとっても誉れではないか。普通の勤め人とは違うのだよ」元右衛門はこういって志津を説得した。

ふじは征之の実家が遠隔の和歌山県田辺市にあることを懸念していた。「帝室林野局にお勤めする人に間違いない」ふじの懸念も元右衛門の一言で打ち消された。破談にしてこの小さな町に更に良縁があるかどうか、父が熱心に勧めるのも無理からぬことだと、志津は思った。少なくとも、彼女の意に反した結婚ではなかった。彼女が田辺から帰郷して父の仏壇に手を合わせた時も、彼女の気持ちに変わりはなかった。ふじは吹雪について帰ってきた雪まみれの彼女の身体を抱えるようにして仏間へ連れていった。仏壇に飾られた父の遺影が別人のように若々しく見えるのも、父の死を認め難くした。縁談を勧めた時の父の火照った顔がいまにも後ろから「帰ったのか」と声をかけてきそうであった。傍に座ったふじの方が悲しみを新たにして嗚咽した。座敷に戻ると、志津は改めて帰郷した訳を話そうとしたが、「何も話さなくていい」と、ふじは涙で濡れた目をしばたかせて彼女を遮った。元一郎も腕組みをしたままで黙ってうなずいた。「まあ、志津さん、すっかりおやつれになって」麗子が熱い茶を運んできて志津にいうと、ふじはその言葉を聞くのが忍びないようにつと立ち上がって仏間に引っ込んだ。元一郎が使用人の呼ぶ声に店舗の方へ出て行くと、彼女は広い座席にぼつんと取り残された。

麗子が手回しよく女中に敷かせた布団の中で、征志は気持ち良げに  
寝息をたてていた。彼女は雪が積った庭に下りた。噴水の傍の大き  
な庭石の陰を見ようとしたが、そこも雪で覆われていた。噴水は止  
まっていた。田辺行きを前に新冠から実家に立ち寄った時、庭石の  
陰の水仙の茎に隠れるように蟹が潜んでいるのを見た。蟹は甲羅を  
噴水のしぶきで濡らしてその朱色を一層鮮やかにしていた。大きな  
つめを挑むように高々と振りかざしていた。「ほら、カニさんよ。こ  
のカニさん、征志よりずっと年をとっているの」志津はしゃがんで  
征志に蟹を見せた。蟹は元一郎が子供のころに捕まえてきて庭に放  
したものだ、母から聞いていた。彼女が見た蟹は、多分元一郎が  
捕まえてきた蟹が繁殖した一匹なのだろうが、母は「元一郎が捕ま  
えてきたカニだ」と真剣にいった。志津が小さなころに庭で見かけ  
たきり、カニのことはこの時までずっと忘れていた。彼女は庭に面  
した部屋を見た。彼女が娘時代を過ごした部屋だ。そこはいま元一  
郎夫婦の部屋になっていた。志津がその部屋を使っていた当時は、  
元一郎夫婦は仏間の上にあたる二階の部屋にいた。彼女は階段の軋  
みを気にしながらそっと二階へ上がってその部屋をのぞいてみた。  
部屋の真ん中に大きな座敷テーブルが取り残されたように置かれて

いて、その上に麗子のものらしいパットが山積みになっていた。志津はパットの夥しい量に呆れた。他に家財道具はなく、障子は長い間張り替えられていないのか、赤茶けていた。彼女はこの部屋を使うことになるかもしれないと思った。元一郎が店舗の二階の商品置場を彼女の部屋に充てたことは意外だった。「あの部屋は近々改築するつもりだから」と元一郎はいった。新冠から送った家具は土蔵の中に運び込まれたままになっていた。「かび臭い土蔵の中にこのままにしておく、せつかくの家具が傷んでしまうがねえ」母はしきりに気を揉んだ。使用人に手伝わして値の張った箆笥類だけを志津の部屋へ運んだ。「こんなことになるのだったら、紀州へ行かずにおけばよかったねえ」ふじは汚れた部屋と不釣り合いな華やかな家具を眺めてつぶやいた。母は志津の田辺行きには気乗りがしなかった。「おまえがこの家にいたいのなら、いていいのだよ」志津が田辺へ立つ前夜に、ふじは彼女にいった。「征之さんが出征したとなると、お前もあちらの実家へ身を寄せるべきだろう。征之さんも手紙でそのように書いて寄こしている。それにお前は先方さんにまだ一度もお目にかかっていないのだぞ」父は少し怒ったようにいった。志津だけでなく、出征していく者の妻はみな同じようにしているのだから

ら」「どうするの、おまえは」母は案ずるように彼女を見た。二藤沢家の嫁ですから、行ってまいります。大丈夫ですわ」志津は軽く笑った。その日夕食は彼女の送別会になった。次兄の元春、国子夫婦、従兄の白鳥幸一、美子夫婦も加わった。兄嫁たちは甲斐甲斐しく子供の世話をする志津を見て「まあ、お志津さんもすっかりお母さんになって」と、しきりに感心した。新冠での新婚生活の話題が中心となり、志津も久しぶりで駒方の家族の団欒を味わった。ふじは終始押し黙り気味で、そのうちに疲れたといつて仏間に入っていった。

「おばあちゃんはどうしたんだ」元右衛門からいわれて麗子が様子を見に行った。「お志津さんや征之さんのことを心配して気が滅入ってくるんですって」麗子は戻って来ると、言葉を転がすようにいった。「心配したって仕方のないことですのに」麗子はその言葉に、志津は無造作に扱われているようで腹が立った。「おばあちゃんが心配するのはもっともだわ。だって、身内で征之さんが初めて出征なされたんだもの。いくらお国のためとはいえ、お志津さんとお子の全生活がかかっているのよ」美子がとりなすようにいった。「中国の戦鬪は收拾のめどが立っていない。日本が国際社会で孤立しているのに、軍部は強気一点張りだ。よほどの腹づもりをしてかからねば今

度は乗り切れないぞ」町会議員の元春は大政翼賛運動に挺身しているのでたちまち声高に演説口調になった。兄たちが政治談議に気炎をあげ始めたので、志津は客間の寝室へ入った。客間に寝せられることで、自分が駒方の家で他人になっていることを思い知らされた気がした。そして彼女が過ごした部屋で生活している麗子に嫉ましさを感じた。翌早朝、志津は元一郎に付き添われて駒方の家を後にした。坂を登りつめたところで、彼女は振り返って江差湾をみつめた。「凧いでいるなあ」元一郎は彼女を促すように声をかけると、両手に提げた荷物を重そうに持ち替えて先に立って歩き始めた。彼女はまくれあがった征之のテープを直すと、兄の後を追った。乳母の家の方角を見て、心の中でさようならといった。江差線の車中ではむっつりと座った兄を前に、彼女は話をするのもなく車窓を流れる景色を眺めていた。青函連絡船の二等船室は足の踏み場もないほど込み合った。「ベッドは一人分しか切符がとれなかった。おまえが寝たらいい」元一郎は混雑に顔をしかめながらいった。ベッドは征志を横に寝せるには狭かったので、彼女は兄に譲った。出航すると船は大きく揺れ始めた。志津の隣で男客数人が酒を呑みながら大声で話していた。内地へ出稼ぎに出かける人たちか、しきりに日当の

ことを話していた。話に興じて高笑いするので、寝いりかけた征志が目を覚まして泣いた。中年の女がうるさいといわんばかりに舌打ちして志津に背を向けた。窓際にいた数人が立ち上がって騒いでいた。開いていた丸窓から波が飛びこんできた。ボーイがあわてて丸窓を閉めてまわった。志津は新冠の生活にいま終止符が打たれようとしているのだと思った。

新婚間もなく、征之は日高支庁の新冠出張所へ転勤した。日高線の列車に揺られて閑散とした静内駅に降り立った時、志津は矢も楯もたまらず江差へ帰りたくなった。視界に入るには山また山であった。駅頭に二頭立ての馬車が止っていた。馬車には菊の御紋章がついていた。馭者台から開襟シャツの青年が二人の姿を見て笑いながら下りてきた。「新冠出張所の牧野です。さあ、どうぞ」二人を乗せた馬車はたちまち町を走り抜けると、谷川沿いの緩やかな傾斜の山道に入って行った。「この川はシベチャリ川というんです」牧野は黙りこくっている志津に微笑みながらいった。彼女は天皇陛下の御料馬をお育てする牧場に向かう畏敬の思いで緊張していた。すれ違う人影もなく、鞭と蹄の音が谷川に響いた。「牧場まではかなり道理がありますの」「そうですね。町から三里ほどです。よいところですよ」

牧野は志津を慰めるようにいった。馬車が走れば走るほど、近くに  
見えていた山々は遠のいていくようだ。気がつくくと、馬車は周りの  
山裾を押し広げるようにして広がった草原へ出ていった。山脈の彼  
方から冷たい風がさつと馬車に吹きつけてきた。馬のたてがみが風  
に舞い上がるのを見て、志津は身体を震わせた。二人はその夜牧野  
の家で泊まったが、志津は一軒の商店もないこの山奥で暮らすこと  
を思うと一睡もできなかつた。不意にプーンという哀愁を帯びた  
音色が響くと、轟きが朝の静かな空気を破った。「角笛ですよ。牧夫  
が角笛を吹いて、毎朝八時きっかりに牧舎から馬を放牧地まで連れ  
ていくのです」牧野の妻の菊子に導かれて外へ出ると、数人の牧夫  
が馬上で角笛を吹き鳴らしながら数百頭の馬を率いて草原へ駆け出  
していくところであつた。疾走する馬たちの伸びやかな姿は、志津  
の沈みがちな心を草原へ解き放つた。「いま放牧地へ連れていく馬は  
夕方になると牧舎へ入れるの。遮蔽馬といって、乗馬用のサラブレ  
ッド、ハクニといった繊細な馬なの。ほら、ずっと向こうに群れて  
いるのがいるでしょう」菊子は草原の彼方から松林のあたりを指  
さした。馬たちが豆粒ほどに点々と見える。「あれは驂馬といって、  
年中放しっぱなしよ。リレマンという種類の軍用馬よ」「雨が降って

も放してありますの」「雨が降ろうが雪が降ろうが、放し飼いよ。軍用馬は風雪に耐えさせなくっちゃ」「でも、冬は食べる草がないでしょう」「馬たちは蹄で雪を掘って、雪の下の笹を食むのよ」菊子は目を丸くして驚く志津に浮き浮きした調子で説明した。「うちの馬博士の知識はみんな私から仕入れたものなんです」背後で牧野の声がした。牧野と征之が笑いながら立っていた。征之が朝八時に官舎から歩いて三分ほどの牧場内にある出張所へ出勤すると、彼が夕方五時過ぎに帰宅するまで、志津は官舎の外に広がる放牧地を眺めて過ごした。日が傾きかけると、牧夫の吹く角笛を合図に放牧した馬たちが土煙をあげて牧舎へ向かって駆けてきた。馬たちが牧舎へ入ると、はるか白樺林まで広がった草原の地平線は茜色に染まり、やがて草原全体が薄闇に包まれていく。夜のとぼりが下りると暗天に星がまたたくばかりで、草原を渡る風音しか聞こえてこない。時折、アイヌの熊撃ちが銃を片手に馬を走らせて放牧地を巡回する姿や場内から馬車が車輪の音も軽やかに出て行くのを見かけると、ひりつくような人恋しさを覚えた。菊子が志津を乗馬に誘いにくるようになってからは少し気が紛れた。馬に触れるのも怖かった志津ではあるが、菊子の指導でめきめき上達した。日曜日に牧野と征之が加わり、四

人で草原の向こうの白樺林まで遠乗りした。乗馬の後の牛乳の味は格別だった。牛乳は牧夫が毎朝運んできた。裏口の上がり框に鍋を置いておくと、寝ているうちに牧夫が勝手に入ってきて大きな牛乳缶から鍋いっぱい搾りたての牛乳を移し入れていった。牧舎の子馬に呑ませるために搾ったもののお裾分けで市価の四分の一程の安さだった。野菜は農場から格安で手に入った。長男の征志が誕生した。志津が毎日牛乳を豊富に呑んでいたので、征志は背中に脂肪を真っ白に付けていた。静内へ買い物に出た折、国防婦人会や縁者に囲まれて万歳で送られる出征兵士の姿が見られた。「出征していく者がふえましたね。戦争が激しくなっているのでしょうか」志津は夫の顔を見た。「桜が咲いたら出張所で家族連れで花見に行くよ。征志も生まれて初めての花見だ」彼は出征兵士から目をそらすと征志の頬を指でつついた。「きょうは馬で山へ調査に行ってくる」彼は咳払いをしながら家を出て行った。よく晴れた朝だった。志津は洗濯物のしわを一枚一枚丁寧に伸ばして物干し竿に干した。手の荒れを気にしながら家に入ろうとすると、征之が戸口のところに立っていた。「あら、山へお出かけじゃなかったんですか」「赤紙が来た」入隊先は和歌山の六一連隊である。夫が立つまでに二時間しかなかった。

汽車が雪で白一色の日本海沿いに走るにつれて、すぼめた傘のよ  
うな形の針葉樹から枝を伸び伸びと広げた広葉樹へと変わった。民  
家の屋根も素っ気ないトタン葺きから重々しい瓦葺きになっていく  
のが、彼女には珍しかった。「藤沢家のことを征之さんは何か話して  
いたか」元一郎は車窓の景色に見とれている志津に声をかけたが、  
彼女はかぶりを振った。これから訪れようとする藤沢家のことを何  
も知らなかった。結婚式には遠隔地という理由で藤沢家の親族は一  
人も出席しなかった。仲人の出張所長が無難な言い訳をして征之の  
両親の祝福の意を伝えたのを覚えている。

新冠へ移ってからも田辺の親元から手紙が来たことはない。彼女  
はそのことが気がかりにはなっていた。征之にそのことをいうと「旅  
行をしたついでに立ち寄ることになっているから」と口を濁した。征  
之の出征がはからずも彼女に田辺行きを実現させることになった。  
車中で一泊して翌日の夕刻に田辺へ着いた。北国の冷たく硬い感じ  
の風ではなく、柔らかな甘い香りをたたえた南国の風が吹いていた。  
元一郎がメモの所番地を頼りに幾人かの通行人に聞きながら小さな  
商店街を過ぎ、目標の鬮鶏神社付近に来ても藤沢家は容易にわから  
なかった。マッチ箱のような町工場が立ち並ぶところまで来て、元

一郎は首を捻りながら目についた煙草店で聞いてみた。このあたりの町工場では貝ボタンを製造しており、貝の粉が道路傍まであふれていた。裸電球をぶら下げた作業場から女工たちがもの珍らし気に二人を眺めた。店番の若い男は元一郎に所番地を聞き直した。「確かにこのあたりやが、知らんなあ」男は店の奥に声をかけた。「藤沢さんいうたら…」老女が奥から顔をのぞかせて怪訝そうに二人の服装に目を走らせた。老女から教えられたように町工場の辻を更に袋小路に入ると、両側に長屋が黒い軒を並べていた。二人は顔を見合わせる、じめじめした足元に気を付けながら入って行った。縁台に腰を下ろして煙草を吸っていた太った女がばつが悪そうに家に入ろうとするのを元一郎は呼びとめて尋ねた。「お向かいさんですよ」女は目をむいて二人を見た。その家には表札がなかった。玄関の戸は敷居のレールが真っ赤に錆ついてがたぴし音がした。家の中は薄暗く、土のような湿った臭いが鼻をついた。元一郎が二、三度声をかけると、「どなたさんや」と、痩せた小づくりの女が出てきた。「藤沢征之さんのご実家でしょうか」「おまはんはー」女は金壺眼で二人をじっと見据えるように窺った。征之の母の政子であった。政子は挨拶もそこそこに「風呂を沸かしましょう」と、裏口へ行った。政

子が焚木を手折る音を聞きながら、二人は黙りこくって部屋を見回した。和箆筥一棹が目につくだけで、家具らしい家具はなかった。衣類は押入れに入りきららないのか、部屋の隅に無造作に積み上げてあった。壁は赤土がむき出しになってところどころ落ちかかっており、摩り切れた畳の縁や変色した襖がこの家の貧乏を物語っていた。先に風呂をもらった元一郎が湯からあがってきた。「足下に注意して入れよ」といって、溜息をついた。二間しかない部屋の横の土間にかまどがある。土間を通って裏庭へ出た直ぐのところに風呂場があった。風呂場の隣が便所になっている。のぞいてみると、便所に電灯も便器もなかった。戸を閉めると日中でも真っ暗になった。板敷きの床を切り取ったままの穴の中に落ち込まないように手探りで用足しをしなければならぬ。浴槽は小さな五右衛門風呂で、洗い場も大人一人がやっと身を置けるほどだった。焚口の傍のごさの上で脱衣した。入浴していると、便所の執拗な臭気に悩まされた。「お前、ここで辛抱できるか」元一郎は床に就く時に耳元でささやいた。

ふじは征之との結婚の失敗に藤沢家の貧乏をあげつらったが、志津は征之の生立ちの貧しさは仕方のないことだと思った。ただ、彼が実家のことを語ろうとしなかったことが、藤沢家の貧を恥じての

こととわかって征之がみすばらしく見えた。征之が志津を娶ったのは、地方で老舗の薬問屋の娘に憧れたにすぎないのであれば、彼女は征之から侮辱されたように思われてくる。征之が実家に毎月月給の三分の一にも当たる二十円を送金していたことも、志津は藤沢家へ行って初めて知ったことである。藤沢家については、征之はすべてを隠蔽していたといつてよい。舅の捨蔵が自転車の荷台に魚を積んで行商する細々とした稼ぎでは、育ち盛りの弟妹四人を抱える生活は賄い切れない。彼女が征之にあてた手紙で送金を断ったのは、実家と自分の生活のけじめが欲しかったからだ。彼女は藤沢家へ行ってから月給を手つかず政子に手渡した。そうすることを政子は臆面もなく求めた。捨蔵はきちんと送られてくる征之の月給で生活が楽になると行商に出かけるのを渋るようになり、毎日安酒に浸った。捨蔵は酔うと志津を相手に息子の自慢話をした。「征之は小さい時から親孝行で頭の良い子じゃった。帝室林野局へ入った者はこの町にはおらんからのう。尋常小学校を卒業してから一時わしについて行商の手伝いをしておった。それから測量会社に勤めておったが、征之が卒業した尋常小学校の校長さんが征之の能力を惜しんで林業学校へ行けというてくれてな。征之もその気になって林業学校へ優秀

な成績で入学したんやが、わしは資力がなかった。征之は牛乳配りや新聞配達をして一人で通った。ずっと靴なんかは女学校の塵箱から拾ってはいて頑張った。頭が良うて真面目やさかい、天皇陛下さまの帝室林野局にも入れてもらうた。ありがたいことじゃ」苦勞してここまで来た征之を親のことで責めるのはかわいそうであった。だが、志津は藤沢家での生活を思い出すと、いまでもむしずが走った。帰郷してから征志の頬がふくらみ、体重が目に見えて増えてきた。元一郎が店から粉ミルクや栄養剤をどんどん続けてくれた効果が現れた。志津の乳房も徐々に以前のような豊かな張りを取り戻してきていることが小さな喜びであった。日本軍が真珠湾を攻撃したニュースで小さな漁港も大騒ぎだった。元一郎は函面を広げて防空壕を造る計画を練っていた。屋敷のすぐ裏の切り立った崖の下に食糧も備蓄できる大きな壕を掘り抜くのだ。「この町が攻撃されるようなことは起ころうはずもないのにねえ。全くあの子は心配性だから」母は工事人夫たちが慌ただしく出入りするのを避けるように志津の部屋へやってきて苦笑した。「田辺の親御さんから手紙がきたかい」母は志津の急な帰郷で捨藏宛に出した手紙の返事が来ないのを気にしていた。あの親が手紙を書いて寄こしたらびっくりものだと、志

津は腹の中で笑った。半年余り同居していて、二親とも字を書いたり読んだりしている姿を見たことがなかった。「アメリカさんが相手ではねえ。征之さんも無事に帰れるかどうか」ふじは背を丸めてつぶやいた。征之がパチンと風船のはじけるように消えてしまう時がこないとも限らない。「おやまあ、これはどうしたんだい」と、ふじは行李の中を見て驚いた。政子が雨の中に放り出した行李だ。濡れたままになっていた着物は染みがついて洗い張りに出さねばならなかった。政子が志津に「出て行け」と口走って土砂降りの外へ彼女の行李を投げたいきさつをふじに聞かせるつもりはなかった。「おまはん、ええもんを持っているな」政子は志津の行李の中をのぞいて口元を歪めるようにしていった。「ほとんど実家の蔵の中へ置いてきました。ほんの身の回りのものだけですわ」「この家は狭いさかいな」政子は小鼻のわきをふくらませた。争いのきっかけとなったのは菊枝の盗みだと、志津は思っている。近くに嫁いでいる長女の菊枝は時々顔を見せた。「志津はんは物持ちやでえ。うちら見たこともないええもんを持ってる」志津が征志の着るものを押入れから取り出しているのを、政子はあごでしゃくって菊枝にいった。「ふーん、おまはん、良家からようこがな貧乏人のところへ嫁に来たもんやなあ」

菊枝はしきりに不思議がった。志津が買い物に出かけるのと入れ違いに菊枝がやって来た日のことだ。志津が戻ると、菊枝は既に帰っていた。押入れの襖が僅かに開いていた。何気なしに襖を開けてみると、きっちり閉めておいた行李の蓋が少し持ち上がっている。蓋を開けてみると、中の衣類を掻き回した痕跡があった。行李の底に小鉤が一つ転がっていた。母が嫁ぐ時に「小さなものでも不自由するものだから」と布袋に小鉤を入れて持たせてくれた。その袋を探してみたが、みつからなかった。次に肌着がなくなった。「おかあさん、私の行李に誰か触りましたか」志津は政子に上擦った声をかけた。持ち物がねずみに引かれるようにかすめとられるのは我慢がならなかった。「うちがそがいなことを知るわけない」政子は大変な見幕だった。志津と年齢が近い菊枝の仕業としか思われない。菊枝が志津の持ち物に手をかけるのを政子は本当に知らないのだろうか。政子はそのことを聞かれて起こる前に誰が触ったのか疑るのがあたりまえである。「風呂水を汲んでくれ」政子はバケツを志津の足元に放り投げてよこした。志津がそう聞いたことが悪いとでもいいいたげな様子である。泥棒まがいの家族を見逃す政子に、志津は呆れ返った。風呂が沸いたので、いつものように湯を金だらいに移して征志

を湯浴みさせた。家族が入ったあとの湯では不潔で征志の顔を洗ってやることもできないので、先に湯をもらって征志を洗ってやることにしていた。「自分の兄なら先に入っても苦にならんのに、この家の者が入ると不潔がるんか。そういう女や、おまはんは――」志津が元一郎に送られて藤沢家へやって来た日に、元一郎が一番風呂をもらったことを政子は引き出してきた。だが、盗みうんぬんのやりとりが政子を逆上させたとは思われない。彼女が志津の行李を雨の中に放り出したのはそれからしばらくしてからのことだ。ふじには押入れの雨漏りで濡れたことにしておいた。「この着物は染め替えて一生袖を通せるようにと張り込んだ末代ものだよ」ふじは情けないといわんばかりに志津の顔をしげしげと見た。「御領さんということ信用し切っていた。お父さんの判断に頼っていたからね」父は志津が田辺へ行っている間に急逝した。父の訃報を告げる電報が田辺に届いたが、葬儀に帰る生活の余裕はなかった。ふじは言葉を継いでいった。「それでねえ、おまえ。食事代を納めてくれないかい。ただ食いをするより、おまえも気持ちさがさっぱりしていいと思うんだよ。こんな世の中になったら、おまえもここでの生活が長くなると思うからね。おまえの口から納めるといっておくれでないか」「私の方も

そうしていただいた方がいいですわ。征志も随分と店のミルクを都合してもらっていますし、その分も計算してもらいます」「お父さんが生きていればねえ。おまえたちの食費ぐらいでこんな思いをさせなかったんだけど、元一郎の代になるとついている嫁にも気遣いがあるし」食費のことは麗子が母にいったに違いない。それでなければ、母がこんな唐突ない方をするものではない。母が仏間に戻ると、志津は直ぐ麗子に金を持っていった。「まあ、こんなにいただいでいいのかしら。ねえ、あなた」麗子は上機嫌だった。「ミルク代はいい。ここはお前の実家なんだから」元一郎は帳簿をにらんで算盤を入れながらいった。父の生前まで元一郎の陰に隠れて目立たなかった麗子は、いまでは家の隅々まで濃く翳を落としていた。父が死んでから家業を元一郎が継ぐと、ごく自然にふじの座も麗子に引き継がれた。女中も使用人も麗子の一声で動いた。使用人がぴりぴりするほどにやかましく気性の激しかったふじが、仏間で端坐して庭をぼんやり眺めていることが多くなった。「あの嫁は小うるさくて」ふじは志津の部屋へ来てこぼした。「おまえの部屋へ行くのがわかっていくせに、どちらへ行くんだなんて聞くんだから。自分の家の中を歩くのに、いちいち断るものがそこの世界にいるだろうねえ」

麗子の干渉がましい態度は志津に対する当て付けだと思った。家事の一端でも手伝えれば麗子に馴染むことができると思ったが、「そんなことは女中にさせます。あなたに手伝ってもらったら、私が叱られますから」と、麗子は一切させなかった。そういいながらも、彼女は女中と一緒に慌ただしく台所で立ち働いた。志津は部屋に引き籠るようになった。「食事ですよ」と女中に声をかけられて、茶の間に下りていった。夜、手水を使うため茶の間を通りかかると、元一郎夫婦とふじがお茶を楽しんでいるのを見かけた。志津は軽く会釈して通り過ぎる。「お茶はいかが」と声をかけられることはなかった。征之が大阪の第四師団司令部電報班へ移ったことを知らせてきた。子供への思いを細々としたためであったが、送金についても触れていなかった。

迎春も志津にとって心許ないものであった。去年の正月は征之との婚約も成り、いまは亡い父を囲んで一家は祝い気分に含まれていた。父が高砂を謡うのを志津は面映く聞いたものだ。元日の朝は足元から寒気がじんじん駆け上ってくるほど底冷えがした。駒方の慣わしに従って、主人となった元一郎の音頭取りで使用人たちも一緒に盃をあげ、雑煮で祝った。「ねえや、このお雑煮ちよっと硬いわ」

麗子が華やかな声をあげた。ふじは女中が転がるように台所から走って来るのを見て、「走らなくてもいい」と、眉間に皺を寄せた。「軟らかいのと取り替えますから」女中はおずおずといったが、「もういい。留子の方がよっぽど間に合ったよ」と、ふじは汁だけを飲んだ。留子は志津が新冠へ立った後で岩内の農家へ嫁いでいった。元春と白鳥が年始に顔を見せた。元春は彼女の顔を見ると、「やあ」と勢いよく片手を挙げてみせたが、それ以上話しかけてこなかった。「征之さんの召集も二年間ほどだろう。参謀本部付の電報班なら前線と違って安心だ」志津は白鳥の色白の顔をみつめてうなずいた。白鳥は兄たちの話に相槌を打ち始めた。話は戦況の見通しと駒方の防空壕づくりになった。元春は相変わらず鉄砲玉のように言葉を吐き出して一座を圧倒した。志津の帰郷について、これといった話はしなかった。志津は部屋に戻ると、むずかる征志を寝せつけた。それから熱い茶を呑んだ。冷えてくる手を茶碗の温もりで温めながら、サトの姿を思い浮かべた。長火鉢の横で茶をすすりながら雪見障子から庭の雪を眺めていたサトは、きりりとして子供の目には怒っているように映った。若くして夫と死別して子供もなかった彼女は何を生きる頼りにしていたのかわからないが、彼女の身近にたった一人寄

り添うのが幼い志津であつてみれば孤独な毎日だったに違いない。志津は六人きょうだいの五番目であつた。男のきょうだいは兄二人の他に弟の信一がいた。志津の上に二人の姉がいたが、旭川と余市に嫁いでおり、会う機会はめつたになかつた。志津は生れると直ぐに乳母へ預けられた。尋常小学校へ入学するまで、乳母と二人きりのひっそりした生活だった。志津はきょうだいの中で自分だけが乳母に預けられたことが不満であつた。末っ子の信一は乳母に預けられていない。信一は尋常小学校に入ると間もなく、突堤の傍でウニ採りに潜つて溺れ死んだ。心の傷になる出来事があるものだ。弟の事件がそうであつた。心の底でいつまでもうずいた。田辺での生活もそうならないように、こだわりを捨てられるだろうかと思つた。

政子にとつても志津が家に入ったことは経済的な理由からいって歓迎していい筈であつた。それなのに、政子はなぜ志津を追い出すようなことをしたのだろうか。志津は政子から責められるいわれは思い当たらなかつた。政子は日がな一日横になつて家事万端を切り回す志津をじつと見ていた。菊枝がやって来ると急に元氣ばつた。駄菓子を頬張りながら稼ぎの少ない捨蔵をなじつた。その後で捨蔵と比べるように近所の主人の稼ぎぶりを羨ましげに語つた。他に話

題がないのかと思われるほど、二人のお定まりの話題であった。二人が志津を快く思っていないことに志津が気がついたのは、雨の日の水汲みの時だった。菊枝が風呂に入りたいといい出したので、志津は裏庭で井戸水を汲み上げた。雨が降り出し、おぶっていた征志がぐっしより濡れた。「雨に濡れても死にはせんわ」水汲みを終えて部屋に入ってきた志津に政子の暗い視線が絡みついた。「貧乏人の生活はしんどいということがようわかったやろ」菊枝はいい気味だといわんばかりに政子と顔を見合わせてにっと笑った。菊枝は風呂を浴びると政子の下着に着替えた。政子は他の家族の洗濯物と一緒に菊枝の下着も志津に洗わせた。「あれでなかなか親孝行な娘やでえ。あの娘は根が正直やさかい、思ったとおりに口に出すんや。口が上手で腹黒い人間より、よっぽどましや」政子は菊枝の下着を身につけた。誰彼の区別がない下着の使い方に、志津は寒気立つ思いがした。「そんなよそゆきの言葉を使わんでもええ。お高くとまっていると思われるでえ」政子が不意にいった言葉にも粘り敵意が感じられた。あの盗みのことで政子を問い詰めてから、菊枝は家に寄り付かなくなった。志津は政子にはっきりした態度をとってもらいたかった。菊枝が姿を現したら、彼女に直接聞いてみるつもりでいた。「家にい

たら気がくさくさしてくるわ」政子は独りごつようにいって菊枝の家へ出かけていった。政子は志津の用意した食膳には手をつけず、茶粥を炊いた。釜の底に落とした茶袋の香りがしみた粥は風味があった。ほとんど水気ばかりだった。「茶粥がこの家の主食やでえ。征之が学校へ通っている時分もこれを竹筒に入れて弁当に持たせたもんや」竹筒に口を当てて粥をラッパ呑みしている征之の姿を思い浮かべると、志津はもの悲しくなった。志津は政子から粥の炊き方を習ったが、政子がつくるようなコクのある味はどうしても出せなかった。それに水のような粥ではとても腹がもたないので、志津は飯を炊いた。「飯は胸につかえてうもうない」政子は志津に背を向けて土間の上がり框に腰を下ろすと、茶粥を椀によそい塩を少々振りかけてくるくと箸で回してからこくこくと音を立てて喉へ流し込んだ。夜遅くに捨蔵が額にひどいけがをして帰ってきたことがある。居酒屋で酒を飲み過ぎて自転車もろとも溝に転げ落ちたということだ。べろべろに酔った捨蔵は売上金をそっくり失ってきた。「そがなことをしているさかい、いつまでたっても貧乏人じゃ。息子の給料にぶら下がつて生きてるのを忘れたんか」政子は捨蔵を罵りながら蹴り回した。政子が志津の行李を雨の中に投げ出した行為も、捨蔵

を責める時に見せた高ぶりに通じているように思われてならない。政子があこの行為をする前日、志津と政子は連れ立って和歌山で征之に面会した。志津は久しぶりに小紋の着物に羽織をはおると、以前の生活に戻ったような華やぎを覚えた。「ええもんを着んとあかん。人から軽う見られるわ」黒っぽい洋服姿の政子は和服を着こなした志津に気圧されたように自嘲気味にいった。堂々と連なる兵舎もいかめしい軍服姿も、志津はとりとめもない夢の中の風景のように頼りなかった。兵隊たちは明日にでもいずこかの戦地へ向かうことになる。風に吹かれる落葉のように征之も死地で翻弄されることになる。征之の方で先に二人をみつけてにこにこしながら近づいてきた。軍帽、軍服に下駄ばきというちぐはぐな格好だったが、新冠を立った時と変わっていない。口元を引き締めるような笑いが政子に酷似していた。「やあ、しばらく」征之は勢いよく敬礼してみせた。「坊やも元気そうだな」征之は子供を抱き上げると頬ずりをした。テブルにつくと、政子は持参した征之の好物の鯖寿司を早速広げた。「ああ、これこれ。きつとつくってきいてくれると思ってた」征之はうまそうに寿司を頬張った。「どうしたんだ。どこか身体の具合が悪いのか」征之は志津の様子を見て食べかけの寿司を置いた。「大丈夫

です」志津は無理に笑顔をつくろうとしたが、波立つような感情を抑え切れずに遂には泣いてしまった。「場所柄をわきまえよ」政子が険のある声でいった。「そうか」征之は深い溜息をついた。「いいたいことがあったら、何でも遠慮なくいえよ」志津はこの場で政子を悪くいうつもりはなかった。征之の苦労を上積みするようなことはしたくなかった。そうかといって、言葉でごまかすのは嫌であった。だから黙って夫の前で思いの丈泣きたかった。それは政子に対する志津の意地であった。「なにもそうめそめそ泣かんでもええやろ」征之の厳しい視線が政子を噤ませた。一面会時間が終わろうとしていた。夫に何をどこから語ろうかと思ひあぐねていた志津は、結局話らしい話はなにひとつできなかつた。「志津をいたわってやって下さいよ」征之が政子の気持ちを確かめるようにいうと、「うちが何をしたというんや」と、政子は寿司の包みを手荒く片づけた。上官らしい軍服が近づいてきたので、話はそこで途切れた。気詰まりな雰囲気のままに征之と別れた。翌日は激しい雨であった。捨蔵は合羽を重そうに引きずりながら行商に出かけた。政子は頭が痛いといって布団の中から出てこなかつた。征志を寝せつけてから、志津は商店街の呉服屋へ仕立てを頼んでいた羽織を取りに行った。家へ戻ると、政子

は布団の上につくねんと座っていた。「お母さん、これ私に似合いますかしら」志津は政子に羽織を見せた。「そがな贅沢なもん、よう買うたもんやな」政子は眉を釣り上げて羽織を見据えた。「あら、この代金は私がこの家へ来る前から用意をしていたものですよ。ご迷惑はかけていませんわ」志津がさっさと羽織をたたむのを見て、政子はいきなり喚きながら押入れの襖を開けると志津の行李を引きずり出した。

志津は結婚して以来会っていなかった高桑清子を家に訪ねた。清子の家は町の北の外れの明燈寺の寺門を下ったところで呉服屋を営んでいた。この店が町きつての老舗であることから、志津の婚礼の衣装揃えは清子の家の店で誂えた。清子は産み月間近な大きな腹を抱えて出て来た。志津は初めて彼女が結婚したことを知った。「まあ、珍客だわ」清子は目をくるくる動かして志津と腕の中の征志を見比べた。彼女は志

津が新冠にいるものとばかり思っていた。奥から額の禿げ上がった表情の暗い男が顔をのぞかせて志津に頭を下げた。「私の主人よ」清子はてれくさそうにいった。「いまでも、駒方の若奥様からごひいきにいただいています。これもこれから仕立てるところです」清子

の父は薄染めの泥大島を広げて見せた。志津はふと清子の父にサトの消息を聞いてみた。値の張った買物なら大抵この店を使っている筈である。「富山さんね、存じあげていますよ。以前はちよくちよくおいでになりました。でも、お引越しなさったことは知りませんでした。函館にでもお帰りになったのかなあ」「函館―」志津は鸚鵡返した。「あれ、ご存じなかったですか。富山さんは函館のご出身ですよ。ご自分でいつかそうおっしゃっていました」志津が真顔になったのを見て、「いえ、私は詳しいことは存じませんよ。ただ、富山さんの話が出ましたので、確かそうじゃなかったかと思い出しているのですが―」と、慌てたようにいった。志津は清子と連れ立って山の上の明澄寺の境内へ登っていった。清子は大きな腹のために時々立ち止まって一息入れた。「この坂を駆け上がった当時が信じられないみたい」清子は額に汗を薄っすらと光らせて笑った。清子の夫は札幌の呉服問屋で長い間奉公していた。問屋に出入りしていた清子の父が小堅い仕振りを見込んで養子に迎えた。「仕入れはうちの人で、私はもっぱら仕立てをするの。一日閉じ籠りでいやになるわ。」二人で裁縫を習っていたころは、清子の腕は決して褒められたものではなかった。その彼女が仕立てで家業の一端を担っていることが

志津にはおかしかった。二人は以前よくそうしたように鐘楼に上った。浜沿いに町が細い帯のように延び、海が広がっているのが一望できた。「戦争はいつ終るのかしら」志津は征之の出征の話をした後でつぶやくようにいった。「大丈夫よ」清子が志津を励ますようにいったその言葉も娘時代からの彼女の口癖で、志津は懐かしかった。

清子の話では尋常小学校時代の同級生も二人が出征していた。「戦死した人はいないわね」「ええ、でも、死んだ人は一人いるわ」それは漁師になった佐野吉雄だった。嵐の早朝に港の沖合で貨物船が座礁した。漁業組合から三隻のボートが救助に向かったが、三隻とも港を出たばかりのところで高波を受けて転覆した。佐藤はその時に死んだ。「泳ぎ達者だったのにねえ。他の人はみんな救助されているよ」清子は残念そうに力んでいった。信一が溺れ死んだ時は風で波音が消えていたことを志津は思い出した。信一は志津にウニを採ってくるように頼まれて潜った。いつまでも浮かんでこなかった。波にえぐられた突堤の下に這い入り込んで死んでいた。信一を死なせてしまったのは自分なのだという思いが記憶の彼方から込み上げてきた。「えっさ、えっさと、鉢巻きをした漁師がボートに何人も乗り組んで權を漕いで勇ましかったんだけどなあ」清子は黙っている志

津に救助活動を見に行った時の話を興奮気味に語った。「かわいそうに、佐藤君のお母さん、それから少しおかしくなったのよ」清子は指で頭をはじいた。志津は清子の家から帰ると、足袋をとって左足のくるぶしをみつめた。肉と骨を削り取った古い傷痕が茶色の皺になって陥没をつくっている。明澄寺の雪に埋もれた坂道を征志を抱いて登ったので、傷痕がほてってうずいた。志津は傷痕を撫でながら清子の父からサトが函館の出身と聞いたことで意外な思いにかられた。函館は志津にとっても忘れられない。志津の足の手術は函館の病院で行われた。伝い歩きを始めたばかりの志津の左足首は転んだ拍子に挫いて腫れ上がった。小さな腫れは悪化して脛の方にまで広がり、町医者の手には負えなくなった。元右衛門は伝を頼って函館の大病院へ志津を運んだ。結核性骨膜炎と診断された。結核菌に侵された小さくなるぶしを削る二回の大手術でも経過は思わしくなかった。三回目の手術が成功しなければ、志津の左足首は切断されることになった。入院生活でサトがずっと付き添っていたことはサトから聞いていた。手術の話をしたがらない母に、志津はうそ寒さを覚えた。「ひどい傷やな、どないしたんや。征之は知っていたんやろな」政子は湯上りの志津の足に目を留めて露骨に不快な表情を見

せた。志津は黙っていた。政子の言葉にいかにも息子が傷ものを押し付けられたといわんばかりの不満が漂っていた。「いつも和服を着たがるのは、足袋で傷を隠すためかの」政子は和服好きの志津に時々そういったが、その言葉は当たっていた。志津は物心ついてから素足に下駄で外へ出ることはなかった。傷痕は大きく、醜く、すぐ人目についた。この傷痕を結婚するまで征之に隠していたことが彼に対する唯一の負い目であった。志津は政子にその心を見透かされたことで、薄れつつあった傷痕への羞恥を呼びさまされた。

駒方の防空壕が完成した。元春と白鳥が夫婦連れでやってきて完成祝いをした。国子と美子が金を出し合って征志の服を買ってきた。胸に二つ大きなポケットがついている青い服で、軍服のような怒った感じがした。ごわごわしていかにも丈夫そうだ。「こんな時代だから、実用的なものがいいと思って」国子は服を征志にあてがった。「あら、少し大きかったかしら」国子は困ったように美子を見た。「子供はじきに大きくなるからね。袖あげしてやればいい」ふじが口を挟んだ。志津は袖を捲り上げてみたが、それでもかなり大きく不格好だった。「それでいいよ。物不足の時代に長く着られるもの」ふじの投げ遣りな言葉に、国子と美子は「いいの」と志津を見た。「いまに

飴玉にも不自由するようなことになるかもしれないねえ。すべて戦地の兵隊さんに送るのが優先するでしょうから」麗子はふだん見向きもしない征志に手を差し伸べながらいった。同じ家に住んでいても会釈を交わす程の触れ合いしかなかったので、志津は麗子の仕草が白々しいものに思われた。「この町も兵隊さんでいっぱいだよ」

「港の輸送船はどこへ向かうのでしょうか」港には三隻の大きな輸送船がいつの間にか係留されていた。町に溢れている兵隊たちはその輸送船でやってきた。輸送船がこの港に姿を現してからもう半月になる。兵隊を陸に揚げた後の空っぽの輸送船は波に揺られてぎしぎし音を立てていた。船体の塗装が剥げ落ち、操舵室の窓ガラスは取り外されて難破船のような感じがした。テーブルに飾った生花の方へ国子と麗子は近づいていった。美子はその隙をねらったように志津の耳元に口を寄せた。「いろいろ大変だったよね。この家でも遠慮しちゃだめよ」美子はいたずらっぽく顔をしかめて笑った。美子の耳にも、志津の帰郷の事情や駒方の家での冷えた状態がそれとなく伝わっているに違いない。「あんなところに通信施設を造ってもらったら困るんだ。軍のお偉方に談判する」元一郎は酒の酔いが回ったらしく、大きな声を上げた。駒方の防空壕のある崖の上に、軍が

無線基地を造るため工事を始めていた。「あの施設をねらって爆撃でもされたら、壕の中で一家全滅だ」盛んに息巻く元一郎を前に、元春は珍しく聞き役に回っている。「ところで、征之さんからその後なにかいってきたの」白鳥が話題を変えるようにいった。「ラングーンからの手紙をもらったきりですわ」一座は静まりかえった。その手紙が到着してから一カ月余になろうとしている。彼は第十五軍南方派遣司令部付の電報班員として元気でいると伝えてきた。「最前線だから大変だろうなあ」白鳥が心配そうにいった。麗子が女中を伴って台所へ立ったのを潮に、元春たちは帰っていった。「次の輸送船が入ったら、うちも軍に部屋を貸さねばならんだろう。志津の手も借りなくちゃならない」元一郎は思案顔をしていった。町では既に兵隊たちが民家に分宿していた。「接待に気をつけないと、腹癒せに兵隊たちが軍刀で畳をずたずたに切っていくそうよ。畳の目のおりに切っているの、家の人は気がつかないんですって。嫌ねえ」麗子が台所から黄色い声を上げた。元一郎が座を外すと、うずくまるように座っていたふじもそそくさと腰を上げかけた。「私、夢を見ましたの」志津はふじを止めるようにいった。「小さなころの夢なんです。不思議なことに私、お母さんのお腹から生まれたことになって

いないのです」「夢……」ふじの顔から表情が消えた。志津を拒絶する意志のように硬い顔付きだった。「いまごろ、なにをいい出すんだね。サトが変なことをいったのかねえ」「夢の中では、お母さんの顔がすぐ乳母の顔になってしまうのです」「どっちの乳母だね、その顔は。サトかい、それともトヨかい」「トヨですって」志津は驚いて母の顔をみつめた。「おまえが生まれてすぐに預けた乳母だよ。それが肺病やみだった。近所から知らせる人があつてびっくりして行ってみると、ぽっぽするほど熱のある身体でおまえといっしょの布団に寝ているじゃないか」「それで、トヨはその後どうしたんです」「おまえを引き取ると、間もなく死んだよ」ふじは鬢のほつれを直した。

「トヨはお父さんの妾だった。私が大事に蔵に入れてあつた竹編みの茶箆筒がトヨの家あるのをみつけて、ようやくわかったことだよ。お父さんが私の目を盗んで運んでいたんだね」ふじの目の中の煮え滾るものを見て、志津は母をようやく理解できたように思った。肺病やみのトヨに抱かれて志津は結核菌を移された。志津がトヨから引き取られた後も、菌は志津の健康な身体の中をぐるぐる回り続け、挫いた左足のくるぶしに取り付いた。志津が入院してから、サトがトヨに代わって乳母になった。「古いことだよ」ふじは初めて志津に

その経過を語って顔をしかめた。「サトは留萌の親戚に身を寄せましたわ」ふじはやはり知らなかった。目から怒りが消えていた。「何のことだ」傍を通りかかった元一郎が足を止めた。「おまえは正真正銘の私の妹だ」元一郎は唇を嚙むと志津から顔を背けた。麗子は水盤の前に座って花の姿勢を直していた。背を向けていたが、志津の話にじっと聞き耳を立てているのを志津は知っていた。「これはお前のものだよ」ふじは仏間から掌大の写真立てを持ってきた。漆塗りの木製で、縁に水甕を頭に載せたエジプトの女たちが刻み込まれていた。写真立ての中は空であった。志津はそれを手にして、幼い頃、彼女の勉強机の上に飾られていたものであることを思い出した。確か、父が札幌か函館へ商用で出かけた折にお土産に買ってきてくれたものだ。志津とサトがあの家のお玄関前で一緒に撮った写真が入れてあった。サトは向かって右側にしゃがんで、立っている志津の背を抱くようにして写っていた。ふじがその写真を机に飾らせたのは、志津がサトの家から帰ってきた後も彼女を恋しがったからかもしれない。それがいつ頃まで彼女の机の上に置かれていたのか記憶になかった。母が今まで写真立てを仏間の片隅に置き続け、こうして志津の前に持ち出してきたことに軽い驚きを感じた。母はいつかそれ

を志津に手渡さなければならぬと思いつけてきたのだ。志津は部屋に戻ると、写真立ての縁のエジプト人の彫刻を撫でた。彼女はただ実家になじめないままに一人部屋にいて、指で彫刻をなぞって幾人の姿が彫り込まれているのか数えたことがあった。机の上の他の置物は形すら覚えていないのに、エジプト人の彫刻だけはいつまでもくつきりと彼女の脳裏に残っていた。彼女は写真が失われていて惜しいとは思わなかった。サトを訪ねて足の傷痕をつくった日々のことを何の恥じらいもなく彼女と語り合うことで寄辺のない心を納得させたかったけれども、その思いは未知のトヨというもう一人の乳母の死を知って萎えていった。傷痕がうずき始めたことで、身体が冷え切っていることに気がついた。それはすべてのものに見放され、一人で死んでいったトヨの心の痛さだと思った。サトへの思慕を押し退けてくるその痛さを噛み締めることで、彼女は乾いた心が癒されていくのを覚えた。志津はアルバムを繰って新冠で撮った写真を取り出した。牧野夫婦と遠乗りをした時のものだ。馬の傍で征之と彼女が並んで立っているところを、牧野が撮影した。二人とも乗馬服に身を固めて鞭を手にしている。彼女は手綱をとって得意そうに胸を張っていた。写真立てにあてがってみると、少し大きかっ

た。缺で縁を切り取って写真立ての中に納め、テーブルの上に置いた。古い写真立てはその写真を入れたことでまるで印象の違った真新しいものに見えた。彼女は近寄って彫刻をみつめた。すると、やはりサトと一緒に撮った写真が下地に見えてくる。そして写真立てに近づけた彼女の顔に見覚えのないトヨの熱っぽい息遣いが吹きつけてくるように感じられるのだ。彼女は自分の心の中を覗き込んでいるような心地がした。それは幼い心であった。トヨに抱かれた日々は左足で枯れ果てた結核菌のように死んだ出来事にならなければならぬ。元右衛門は既に死に、ふじも遠からず乳母たちの風景のように化石になっていく。生い立ちの枯れた絆に頼ろうとする無明の心は幼少期の遺産ともいふべきこの写真立ての中に収めてしまおう。そのような所作をさせるのも、征之との愛の育みが結実の時を失って青いままになっているのかもしれない。志津はがらがらの音をかしましく響かせて遊んでいる征志をみつめた。外の日差しが積雪に照り返して征志の顔が明るく見えた。志津はひしと征志を抱きしめた。征之が無事に帰ってくれたら、また新たな生活をあやなしているかと思った。「さようなら、お母さん」志津は遠のいていく母に心の中で叫んだ。雪はまだ深かったが、海の色は急に明るさを増して

春の到来を告げていた。志津は征志を抱いて港へ行った。係留されていた輸送船は掻き消すように出航していた。そのために鷗島の全景が視界を妨げられることなくくつきりと見えた。

(一)

The Japanese Spirit      Publisher/Editor:    Hideki Kubota  
1-26-1407, Takasu 2-chome, Nishinomiya    663-8141    Japan  
Phone: 0798-49-5886  
Fax: 0798-49-5838      [http://homepage3.nifty.com/kubota1407/  
uii26890@nifty.com](http://homepage3.nifty.com/kubota1407/uii26890@nifty.com)

The Foundation Issue was published on June 15, 1991.

The date of our next issue will be on October 15, 2015.